



日本記者クラブ会報

公益社団法人 日本記者クラブ 〒100-0011 東京都千代田区内幸町2-2-1 日本プレスセンタービル TEL.03-3503-2722 <https://www.jnpc.or.jp/>



平和裏に 米ホワイトハウスでバイデン大統領（右）と握手するトランプ次期大統領
=11月13日、AFP時事

ベ이스ターズの首脳が来た
頭の中、ビールかけを楽しんだ

野球をしていた遠い昔、大先輩の代議士が部の激励会にきて「私は補欠の下のパケツだった」と妙な激励してくれた。そのパケツに穴の開いたような選手だったので、説得力も、言う資格もないが、一野球ファンとしてどうにも好きになれないものに、クライマックスシリーズ（CS）がある。

リーグ優勝や日本シリーズの価値を貶めるというのがCS批判の声の大半だと思うが、個人的には戦う前からリーグ優勝チームが1勝しているファイナルステージを認めたくない。ファーストステージを勝ち上がったチームに「頑張ったね。で、なるべくここで退散してほしいんだ」と言っているわけで、それならこんなシリーズは不要だと感じる。たとえば今年、阪神タイガースが勝ち上がり日本シリーズを制していたとしても、考えは変わらない。と、思う。

さて、セ・リーグ3位からの下克上を決めた横浜DeNAベイスターズ監督の三浦大輔さん、オーナリーの南場智子さんを11月に迎えた。現役時代「ハマの番長」と呼ばれていた三浦さんに、CS批判など切り出せず、阪神ファンだとも言えず、「横浜市民です」と自己紹介した。詳細は会見リポートに任せるが、誤った印象を覆す、実に気さくで穏やかな監督だった。そして、記者会見で南場さんからビールかけの極意を教わるとは。聞きながら、大リーグにならってシャンパンにしたら……と頭をよぎる。いや、でもやはりビールかけだ、日本は。誤った印象に過ぎないかもしれないけれど。（専務理事 江木慎吾）

会場で振り返る1年

「選挙イヤー」に熱い討論

企画委員長 藤井 彰夫

世界で重要選挙が相次いだ「選挙イヤー」の2024年。日本記者クラブの記者会見も「選挙」が重要テーマになった。

今年の記者会見（研究会、討論会を含む）の参加者数のランキングでは上位4番目までを選挙関連のイベントが占めた（本稿執筆時点の11月下旬）。

■東京都知事選がトップに

第1位は6月19日の東京都知事選立候補予定者の共同会見（272人が参加）。現職の小池百合子知事、立憲民主党の蓮舫参議院議員、前広島県安芸高田市長の石丸伸二氏、元航空幕僚長の田母神俊雄氏の4氏が議論を闘わせた。SNSを駆使し若者の人気を集めて話題になった石丸氏は当クラブ初登壇となった。

参加者269人の第2位は9月14日の自民党総裁選の立候補者討論。8月の岸田文雄前首相の総裁選不出



インドのスプラマニヤム・ジャイシャンカル外相の会見で司会を務める藤井企画委員長（7月29日）

馬表明を受けて異例の9人による討論となった。経済政策や安全保障など幅広いテーマで「ポスト岸田」を議論した。9月7日には立憲民主党代表選の立候補者討論も開催、参加者数は162人で第4位だった。

総裁選に勝って首相に就任した石破茂氏は政権発足直後に衆院を解散、10月12日に7政党首による討論会を開いた。今年3番目の231人が参加し「政治とカネ」などで激し

い論戦を繰り広げた。

最近では党首選や国政選挙でもテレビやネットなどで様々な討論会が開かれていたが、選挙戦スタート時に全体の議論のベースを提供する当クラブ討論会の重要性は増しているように思う。

「選挙イヤー」のトリともいえる11月の米大統領選では、トランプ前大統領の返り咲きが決まった。当クラブでは3月から「2024米大統領選」シリーズを開始、11月5日の投票日まで合計12回の会見を開いた。

■海外要人の会見も回復

コロナ禍で低調になっていた来日した海外要人の記者会見も復活した。5月にマレーシアのアンワル・イブラヒム首相、7月にはインドのスプラマニヤム・ジャイシャンカル外相の記者会見が開かれた。

6月には、米映画で注目を集めた「原爆の父」ロバート・オツペンハイマー博士の孫のチャールズ・オツペンハイマーさんが登壇した。今回の訪日では祖父が生前訪れなかった被爆地・広島を訪れ、被爆者らに面会した。同氏は「核大国の米国、ロシア、中国の緊張緩和を図らなければならぬ。それは、日本が提唱す

るのが一番良い」と訴えた。この会見の参加者数は134人にのぼり年間5位、選挙以外ではトップになった。

1966年の静岡県一家4人殺害事件で再審無罪が確定した袴田巖さん。9月26日の地裁での無罪判決の4日後の9月30日に姉の袴田ひで子さんと弁護士事務局長の小川秀世弁護士が会見し、116人が参加した。登壇を予定していた巖さんは体調不良で残念ながら欠席となったが、ひで子さんは「涙がとめどなく出て、1時間ぐらい止まりませんでした」と無罪判決が出たときのことを振り返った。

8月19日にはパリ五輪スケートボードの金メダリストの吉沢恋選手が記者会見した。14歳での登壇は、当クラブの最年少記録（これまでは2019年の囲碁棋士の上野愛咲美さん。当時17歳）を更新した。14歳とは思えない落ち着いた受け答えには驚かされた。

トランプ米政権が誕生し、夏には参院選も予定される2025年も、重要な記者会見が続くそうだ。コロナ禍以降はオンライン併用方式が続いているが、なるべく会場参加を増やすべく企画を練っていききたい。（ふじいあきお 日本経済新聞社論説主幹）

上期、プレス向け行事3割減 会見の参加者は平均82人

11月13日の理事会に、今年度上期の事業と決算、さらにこれに基づく通期の決算見通しを報告した。

上期にクラブが主催した記者会見は15、テーマを設けた研究会が34、これに加えて二つの討論会、著者と語るが1件あった。記者ゼミと記者研修会を加えたプレス向け行事は61回と、前年度に比べ3割減った。

大きく減ったのには理由がある。昨年来の「政治とカネ」の問題、年頭の能登半島地震と、大きな出来事が続き、対応するための記者会見や研究会が1月から3月に集中した。特に2月には25の行事を実施し、人員不足となっていた事務局の対応能力が限界に近くなった。研究会等の数を少し抑制してほしいと、3月に事務局側から企画委員会に要請した。このブレーキがかなり強くきき、会見数減少につながってしまった。

記者の参加は会場とオンライン合わせて平均約82人だった。昨年度上期より少し減ったが、目標に掲げてきた80人は超えている。6月19日にあった東京都知事選の立候補予定者

の共同記者会見に272人が集まったことが大きい。記者会見と研究会を分けると、この都知事選を含まない記者会見の平均参加者は84人、研究会は76人だった。また、会場参加率は記者会見が44%、研究会33%だった。全体の参加者、会場の参加者を増やすために、タイムリーな記者会見が有効だと考える。

記者会見には含めていないが、立憲民主党代表選立候補者と自民党総裁選立候補者の討論会もそれぞれ162人と269人の参加があった。一方、ユーチューブ動画再生数をみると、昨年始めた研究会「中国で何が起きているのか」シリーズへの関心が高く、昨年、今年、今年度とも別のゲストの回が視聴数1位となっている。

今年度の記者研修会は災害報道をテーマに8月に開き、台風が九州に上陸するなか約90人が参加した。記者が記者に教える形をとる記者ゼミも、「調査報道」「IT講座」で続けている。一方、サイバー犯罪が注目を集める中、新たに日本ネットワー

クセキュリティ協会(JNSA)と協力して「サイバー記者ゼミ」を始めた。年3、4回開催し、記者の知識と専門家人脈の構築に役立てばと考えている。

2024年度の日本記者クラブ賞は共同通信社客員論説委員の後藤謙次さんに、特別賞は北海道放送ヤジ排除取材班と、テレビ静岡「イーちゃんの白い杖」取材班に贈られた。

上期決算は478万円赤字 通期予算の赤字は圧縮方向

上期の決算は経常収益が約1億6850万円、経常費用が約1億7328万円、約478万円の赤字となった。上期決算をもとにした通期の決算では約761万円の赤字を見込んでいる。

2024年度は2000万円近い赤字予算を組んでいることから、予算に比べれば約1224万円の赤字縮小となる。10月から貸室の賃料を10%値上げしたことが下期の事業収益に反映されることを見込んでいるからだ。新たに職員1人を採用したものの、時期が予定よりも遅れたため、人件費が想定したより少なくなることなども影響している。ただ、赤字であることには変わりはなく、今後も収支改善の努力を続ける。

目次

▼2024年を振り返って	2
▼気候変動・災害担当記者が選ぶ1冊	4
▼今月のクラブゲスト	6
▼会見リポート	7
ニダル・ヤヒヤー 駐日レバノン大使／三浦大輔 横浜DeNAベイスターズ監督、南場智子 デイ・エヌ・エー代表取締役会長／「日本の死刑制度について考える懇話会」／佐藤健 情報・システム研究機構人工知能法学研究支援センター長／西村卓也 京都大学防災研究所教授／石渡明 前原子力規制委員会委員	7
▼ワーキングプレス	10
米大統領選 トランプ氏勝利	12
日本被団協にノーベル平和賞	NNN 増田理紗
元大阪地検検事正性暴力事件	毎日新聞社 宇城昇
共同通信社 石原知佳	
▼新・列島報告 神奈川県	13
横浜DeNAベイスターズ 日本一	松村祐介
共同通信社 神奈川新聞社	
▼書いた話書がなかった話	14
ブラザ合意の日本側攻防	15
為替に振り回された日々	滝田洋一
▼リレーエッセー	16
美谷島邦子さん 日航機墜落事故の遺族	共同通信社 田中美恭
▼名古屋刑務所 視察	17
中日新聞社 芳賀美幸	
▼マイBOOKマイPR	18
▼記者ゼミ	19
▼写真回廊	20

『気候文明史 世界を変えた8万年の攻防』

(田家康著 日本経済新聞出版 現・日経BPマーケティング)

気象予報士である著者が、南極の水床コアや湖沼の堆積物などに保存されたデータを基に、気候変動が人類の歴史にどのような影響を及ぼしてきたのかを考察する。人類は過去に何度も太陽活動の低下や火山の噴火による寒冷化に襲われ、それに伴う飢饉や民族移動を経験した。例えば6世紀に起きた気候異変は各地に混乱をもたらし、東ローマ帝国の衰退や日本での仏教の普及につながった可能性があるという。大気中の二酸化炭素濃度上昇に起因する現代の地球温暖化にも、目を背けずに対処しなければならないと、改めて認識させてくれる。

共同通信社科学部長 池内 孝夫



『関東大震災「虐殺否定」の真相 ハーバード大学教授の論拠を検証する』

(渡辺延志著 筑摩書房)

災害報道の歴史を振り返るとき「原点」は関東大震災であり、膨大な誤報が「朝鮮人虐殺」事件を助長した事実から目を背けることはできない。歴史学での評価は定まっているこの事件を否定する論調が近年拡散し、権威ある大学の教授の論文(後に改訂)にまで行きついた。論文を検証した著者は論拠が当時の新聞の誤報にあることを示し「記事を新聞の側が総括することなく放置してきたことがこのような主張を生み出す原因となった」と結論づける。過酷な取材の過程で生じた誤報の検証とともにメディア環境が激変した今日に照らし教訓に向き合おうとする姿勢にも学ばされる。

日本放送協会解説委員 松本 浩司



『防災心理学入門 豪雨・地震・津波に備える』

(矢守克也著 ナカニシヤ出版)

Grande、Tall、Shortといえ、大手コーヒーチェーンのサイズでおなじみだが、この本のエッセーも行数に応じて3サイズが用意されている。防災にまつわる豊富なメニューは、いずれもお代わりしたくなる味わいだ。防災対策は大事かと聞くと、誰もが大事と答える。だが、実践している人は一部にとどまるだろう。いつ役に立つかわからない防災対策は、後回しになりがちだ。この本では災害に対する人間心理や社会の反応に焦点を当て、防災意識と行動のギャップを埋めるアイデアと方法が提供される。同じ著者の『天地海人―防災・減災えっせい辞典』(ナカニシヤ出版)という姉妹本もお薦めしたい。

河北新報社防災・教育部部長兼論説委員 須藤 宣毅



『人が死なない防災』

(片田敏孝著 集英社)

東日本大震災発生の翌年に刊行されたこの書を、時折無性に読み返したくなる。行政主導で進んだ日本の防災は、その副作用として、過剰なまでの行政依存・情報依存をもたらした。その結果、住民は自分の命や安全を他者(おもに行政)に委ねる「災害過保護」の状態にある。自らの命を守ることに主体的であれ、という至極真っ当なメッセージが胸に突き刺さるのは、私自身も「過保護」の影響下にあるからだろう。著者は言う。「人為的に高める安全性は、人間の脆弱性をも高める」と。災害に、一人の人間としてどう向き合うのか。その姿勢を確認したくなるたび、私はこの書を手取る。

TBSテレビ報道局解説委員(災害担当) 福島 隆史



『魔除けの民俗学 家・道具・災害の俗信』

(常光徹著 KADOKAWA)

東北は「マンザイラク」、京都は「ヨナオシ」、高知では「カアカア」―。地震の仕組みが未解明だった昔、人々は地面が揺れるたびに鎮まるのを願ってこんな言葉を唱えた。高知県出身の民俗学者、常光徹さんは各地に伝わる唱え文句を紹介し、由来を考察する。カアカアは津波などに備えて「川」を見ろという意味だったとし、さらに、カラスが鳴くと地震がやむという東北の言い伝えから鳴きまねをした可能性にも触れる。実際、昭和南海地震でお年寄りが「コッコッ」と唱えていたという証言にも取材で出会った。唱え文句は庶民の想像力であり、警句でもあったようで興味深い。

高知新聞社報道部 山崎 彩加



『古地図が語る大災害 絵図・瓦版で読み解く大地震・津波・大火の記憶』

(本渡章著 創元社)

過去の災害を後世に伝える「自然災害伝承碑」の地図記号が制定されて今年で5年。先人の教訓を少しでも防災報道に生かしたいと思う中、今年は南海トラフ地震が話題になりました。そこで西日本エリアの過去の災害を深く学ぼうと思っていたところ出会ったのがこの本です。大阪を中心とした古地図を題材に、過去の南海トラフ地震をはじめ、大地震や大火災、水害などの被害の実態が細かく書かれています。古地図からは災害と復興の繰り返しを生き延びてきた先人たちの思いがつまっており、災害に向き合うヒントが隠されている気がします。

日本テレビ報道局社会部デスク 災害・航空担当 中濱 弘道



気候変動/自然災害

担当記者が選ぶ1冊

12月号恒例のおすすめ本特集。今年は「気候変動・自然災害」を担当する記者11人に、おすすめの1冊を選んでいただきました。



『地球に住めなくなる日 「気候崩壊」の避けられない真実』(デイビッド・W・ウェルズ著 NHK出版)

世界の気温がまた史上最高を更新しそうだ。人類は最悪のシナリオに向かって突き進んでいるようにみえる。科学を無視すれば心は穏やかだが、我に返ると絶望感に襲われる。本が書かれた5年前、気候科学者は「気候変動によるリアルな未来図を提示した警告の書」と評した。読み返すと、指摘がことごとく当たっていて予言の書だと思う。

当時、米国はパリ協定から離脱していたが、その後、若者が抗議の声を上げ、米国もパリ協定に復帰するなどいい動きもあった。だが、それもつかの間、世界では戦火が相次ぎ、米国にはトランプ大統領が戻ってくる。

朝日新聞社編集委員 石井 徹



『地球温暖化で雪は減るのか増えるのか問題』(川瀬宏明著 ベレ出版)

地球温暖化で、熱波などの被害がこれ以上深刻化するのは避けたい。でも、冬が暖かくなり雪害が発生しなくなるのなら——。ところが事はそう単純ではないという。

著者は、個々の気象現象に温暖化がどれほど影響したかを定量的に分析する「イベント・アトリビューション(EA)」研究をけん引する科学者の一人だ。本書はEAも含め、「温暖化も悪くない」と誤解しないために必要な最低限の知識を提供してくれる。EAは我々が既に気候危機の真ただち中にあることを教えてくれる貴重な「ツール」だ。今後も著者の研究に注目し、日々の報道に生かしていきたい。

毎日新聞社くらし科学環境部副部長 大場 あい



『地球があぶない! 地図で見る気候変動の図鑑』(ダン・フッカー著 創元社)

取材では、気候変動問題に取り組む人にも、関心を持たない人にも出会う。その意識の差に戸惑うこともあるが、世界レベルで進む地球温暖化をイメージし、「自分事」として受け止める難しさも一因だろう。

この本は小中学生などに向けた図鑑だ。イラストや地図がふんだんに盛り込まれているので、気候変動で何が起きているのか、視覚的・直感的に捉えやすい。衣服が生産・流通・消費・処分されるたびに、どれだけの温室効果ガスが排出されるのか——。その量を眺めるだけでも、地球温暖化が少し身近に感じられるのではないかな。

読売新聞社科学部 天沢 正裕



『グリーン戦争 気候変動の国際政治』(上野貴弘著 中央公論新社)

気候変動はもはや科学の問題ではなく、国益をかけた国と国のぶつかり合いである。その現実を米国や欧州連合(EU)、中国などの環境・エネルギー政策、競争政策の分析を通して鮮やかに描いて見せる。温暖化対策を巡る国際交渉は南北対立、米中対立などと切り離せない。ロシアによるウクライナ侵略が、脱炭素への道のりをさらに険しくしている。利害が複雑に絡み合うなか、日本の政策はどうあるべきか、考えるヒントを与えてくれる。執筆は米大統領選前だが、温暖化対策に背を向けるトランプ氏が勝利した場合も予期しつつ議論を展開している点も興味深い。

日本経済新聞社編集委員 安藤 淳



『グリーン戦争 気候変動の国際政治』(上野貴弘著 中央公論新社)

本書は、国連気候変動枠組み条約の締約国会議(COP)にたびたび参加している著者が、脱炭素に向けた各国の動きを分かりやすく解説した力作だ。折しも米国では気候変動対策に後ろ向きなトランプ氏が次期大統領となり、欧州議会選でも右派が伸長。著者が先鋭的、と表現する近年の先進国での動きは、曲がり角に差し掛かっている。

人類共通の課題でも国益を念頭に置く世界各国の駆け引きは、まさに「戦争」だ。脱炭素関連での供給網を握る中国も相手となる。負け戦としないためのしたたかさが、日本には不可欠だと思い知らされるだろう。

産経新聞社社会部科学報道室 小野 晋史



今月のゲストの皆さん

ゲスト全員の会見レポートは右のQRコードを開きウェブサイトで見られます。出席欄の「会」は会場、「オ」はオンラインの参加人数です。



*下記のゲストの会見レポートは7～9ページに掲載しています

Nidal YEHYAさん 駐日レバノン大使

■ 11・1 / 出席：会21人、オ28人 / 司会：出川展恒委員 / 通訳：池田薫さん

三浦 大輔さん 横浜DeNAベイスターズ監督

南場 智子さん ディー・エヌ・エー代表取締役会長

■ 11・11 / 出席：会60人、オ45人 / 司会：沢田啓太郎委員

「日本の死刑制度について考える懇話会」

井田 良さん 座長(中央大学大学院教授、前法制審議会会長)

笹倉 香奈さん 座長代行(甲南大学法学部教授)

片山 徒有さん 委員(「被害者と司法を考える会」代表)

神津 里季生さん 委員(前連合会長)

中本 和洋さん 委員(元日本弁護士連合会会長)

川村 百合さん 事務局(ゆり総合法律事務所弁護士)

■ 11・13 / 出席：会28人、オ38人 / 司会：井田香奈子委員

佐藤 健さん 情報・システム研究機構人工知能法学研究支援センター長

■ 11・14 / 出席：会15人、オ35人 / 「生成AI」④ / 司会：倉澤治雄委員

西村 卓也さん 京都大学防災研究所教授

■ 11・15 / 出席：会19人、オ33人 / 「巨大地震を考える」④ / 司会：行方史郎委員

石渡 明さん 前原子力規制委員会委員

■ 11・18 / 出席：会33人、オ39人 / 司会：行方史郎委員

西山 隆行さん 成蹊大学教授



「大統領選挙で誰が当選するかを予測するのは困難だが、選挙後に混乱が発生し、分断がさらに進行するであろうことは想像できる」『大統領選挙は米国民の分断を鮮明にするイベントだ』『二大政党ともに内部に対立を抱え、両者とも必ずしも強くない、むしろ弱い候補だ』

■ 11・1 / 出席：会16人、オ46人 / 「2024 米大統領選」⑫ / 司会：杉田弘毅委員

関 志雄さん 野村資本市場研究所シニアフェロー



「中国では需要不足による景気後退と供給側の制約による潜在成長率の低下が同時進行中だ」『需要不足には経済対策の発動、供給側の制約には革新的技術主導の「新質生産力」の推進などの対策がとられる。中長期的経済発展持続のためには政治改革も必要だ』

■ 11・11 / 出席：会25人、オ43人 / 「中国で何が起きているのか」⑪ / 司会：高橋哲史委員

林 伴子さん 内閣府政策統括官



「若年女性が大都市圏に流出し、一部地域で未婚者の男女比の不均衡が存在。地方での少子化にも関係している」『東京圏は女性の賃金水準が高く、男女間賃金格差も小さい』『地域経済の存続に向けて、若い女性が暮らしたいと思える場所になるかが重要だ』

■ 11・18 / 出席：会16人、オ34人 / 「家族の変容と日本経済」 / 司会：小林伸年委員

関谷 直也さん 東京大学大学院教授



「南海トラフ地震臨時情報は確率情報であることが理解されていない。『予知』ではなく統計に基づく情報だということを明確に伝えるべきだ」『地域や自治体、関連企業でどう対応するか事前協議が必要だ』『巨大地震警戒』もこれを踏まえて再度議論すべきだ」

■ 11・25 / 出席：会15人、オ38人 / 「巨大地震を考える」⑤ / 司会：行方史郎委員

増田 雅之さん 防衛研究所中国研究室長



「中国はトランプ次期大統領がどういう手を打つか不安を持って眺めている。不安感が高まった一つの要因は昨年来の北朝鮮とロシアの接近。3国の連携が深まり『陣営化』の枠組みが浮きあがるとは避けたい、というのが中国での議論の中心テーマになっている」

■ 11・27 / 出席：会30人、オ54人 / 「中国で何が起きているのか」⑫ / 司会：高橋哲史委員



年代初頭、イスラエル軍がレバノン地上侵攻を開始して1カ月以上が経過した。軍はパレスチナ自治区ガザのイスラム組織ハマスと共闘する親イラン民兵組織ヒズボラの国境地帯からの掃討を掲げ戦線を拡大、昨年10月以降のレバノン側死者は3千人を超えた。駐日レバノン大使のニダル・ヤ

ヒヤー氏は記者会見で「未曾有の人道危機だ」と強調、日本政府をはじめ国際社会に軍の即時撤退実現に協力するよう求めた。

ニダル・ヤヒヤー 駐日レバノン大使 ヒズボラは抵抗運動の中核

11月1日

ラン指導の下、ヒズボラが生まれた。「撤退を求める国連決議を守らないイスラエルと戦うため抵抗運動が組織された。今ではヒズボラが中核で、レバノン政府は抵抗運動を承認している」とヤヒヤー氏は言う。「ヒズボラはレバノンの一部だ」

個人的な話になるが、2022年にレバノンの首都ベイルートで、幼少期にイスラエル軍に親族を殺害された40代女性に出会った。女性はレバノン南部で1993年、空き地で遊んでいたときに、いとこと共にイスラエル軍の砲撃に巻き込まれたという。自分の腕の中で1歳年下のいところ息を引き取ったと振り返り、「イスラエルを許すことはない」と語った。こうした憎しみが多くのレバノン国民に共有され、ヒズボラ支持につながっているのは間違いない。

イスラエル側からすれば、ヒズボラは「テロ組織」で、壊滅すべき存在だ。だが、戦線拡大はイスラエルへの憎しみの拡散を意味し、イスラエルの「安全」が遠のくのもまた事実だろう。「抵抗運動の担い手はレバノン南部の市民だ」。ヤヒヤー氏が指摘したヒズボラの実情は、戦闘長期化がさらなる「報復の連鎖」につながることを暗示している。

共同通信社外信部 平野 雄吾



三浦 大輔 南場 智子 代表取締役会長 ツートショット自撮りの関係

11月11日

南場智子オーナーは、白のスーツの下に鮮やかなブルーのインナーを着て、ベイスターズカラーのバッグを持って控室に現れた。到着するなり、三浦大輔監督に「もう疲れは取れた？ 少しは落ち着いたら？」と優しく声をかけていた。

日本シリーズの第6戦では、横浜スタジアムに入りきれないファンが球場周辺に大勢集まった。南場オーナーはその様子を見て、いてもたってもいられず、球場の外に飛び出したという。

「ファンの方々に少しでも感謝の気持ちをお伝えしたくて。5回裏に7点取ってくれたので、これなら大丈夫と思って、球場の外を歩きました」

南場オーナーに気づいたファンからは「南場ママだ！」と歓声が上が

った。今回のプレーオフは全試合、球場で観戦。ベイスターズ愛あふれる姿に、ファンの間では「南場ママ」と呼ばれている。この日、記者クラブからの贈呈品であるボールペンを渡されると、「早速使つていいかしら」と箱から取り出した。「南場ママ」と慕われる理由が分かるような気がした。

三浦監督は、ビシッと決めたリゼントとは対照的に、物腰が柔らかい。試合中の穏やかな表情が印象的だが、「内心は違います。日本シリーズでもドキドキしっぱなしでした」と明かしてくれた。

強調していたのがコーチ、スタッフの力。「それぞれが役割に徹してくれましたし、その案で行こうということが多かったですね。偉ぶらず、聞く耳を持ち、誰とも本音でぶつかる。令和の時代に沿った、監督像の一つだろう。

会見終了後のこと。演壇をバックに、三浦監督が南場オーナーとのツートショットを自撮りしていた。40年近くプロ野球界を眺めてきたが、ここまで自然で、フラットなオーナーと監督の関係を見たことがない。新しい風を確かに感じた。

企画委員 日刊スポーツ新聞社編集委員

沢田 啓太郎

「日本の死刑制度について考える懇話会」

制度検討の会議体を提言

11月13日



左から中本さん、神津さん、笹倉さん、井田さん、片山さん、川村さん

記者クラブで公表した。

同懇話会は学者や国会議員、経済団体代表、元検事総長、元警察庁長官、犯罪被害者遺族らが委員を務めた。死刑制度について「現状のまま放置できない」との認識で、国会や政府に検討のための会議体を設けるよう提言している。

結論が出るまでの間は、死刑執行の停止も検討すべきだとも求めた。井田座長は「これまでの死刑論議は存置派と廃止派が意見をぶつけ合うだけだった。今回はどれだけ理解し合えるか」が狙いだと強調した。

「日本の死刑制度について考える懇話会」

（座長）井田良・中央大大学院教授が11月13日、政府への提言を報告書にまとめ、日本

同懇話会は日弁連の呼びかけで今年2月に設立された。確定死刑囚だった袴田巖さんの「再審無罪」が確定したばかりだ。戦後5件目の死刑台からの帰還だった。神ならぬ人が行う裁判には誤判、「無辜の処刑」の危険性があることは明白である。

死刑事件ばかりでなく、絶えない冤罪事件を受けて、日弁連は2016年に「死刑廃止」を掲げる宣言を採択した。そもそも欧州を中心に事実上、海外の7割超の国で既に死刑が廃止されている。提言は国連が死刑存置国に対し死刑停止を求めている現状も踏まえている。

世論調査では死刑制度を支持する結果が出るものの、「迷い」を含む民意を反映しているか疑問視した。

「被害感情や処罰感情が死刑制度の根拠となるかは別の問題だ」とも述べた。また、一般的に死刑制度自体が犯罪抑止効果を持つと信じられていたものの、「科学的な証明がない状況だ」と退けてもいる。

死刑確定者の処遇、執行の手続きや執行方法などについても検討すべきだと指摘。少なくとも現行制度は憲法の人権保障の思想と合致しないのではないかと問題提起した。

東京新聞論説委員 桐山 桂一

「生成AI」④

佐藤 健

情報・システム研究機構人工知能法学研究支援センター長

11月14日

「法律とAI」ニ刀流育成を

人工知能(AI)の波は、今や法の領域にも押し寄せている。筆者は長年、スタートアップ企業を取材しているが、契約書作成やリーガルチェックなど、AIを活用したサービスを手掛けるスタートアップ企業が最近相次いで生まれている。生成AIの登場は、この流れをさらに加速させているかのようだ。しかし、高度な専門性を要する法的判断の最前線である裁判実務において、AIはどこまで踏み込めるのか。「人工知能法学」の先駆者である情報・システム研究機構人工知能法学研究支援センター長の佐藤健氏はその限界を鋭く指摘し、可能性に言及した。

佐藤氏が危惧するのは、生成AIの「ハルシネーション」(幻覚)だ。膨大なデータから学習したパ



パターンに基づき、確率的に最適な単語を選択する生成AIは、論理的推論を欠く。そのため、「勝手な法解釈はでき、もっともらしいが間違いも多く、精査しないと使えない」と佐藤氏は指摘する。

一方で佐藤氏は自ら開発を牽引する判決推論システム「PROLEG(プロレグ)」を紹介する。過去の判例や法理論を学習し、新たな事案の判断を支援するこの革新的なツールはAIと法の融合の可能性を示す。コンピュータサイエンス研究者としての顔と、法学研究者としての顔を持つ佐藤氏。AIの理論的研究を長年行った後、その応用を求めて法科大学院に入学して法学を学ぶとともに、50代で司法試験に挑戦し、見事合格を果たした。

デジタル社会の法的課題に立ち向かうためには、IT技術と法律の両方に精通した人材育成が急務であろう。実際、欧州では、両分野を統合的に学べる大学が存在するという。「日本の大学でも専門的な教育プログラムを提供する必要がある」。佐藤氏の提言は、デジタル社会の法的基盤を築く重要な指針だ。

日本経済新聞社総合解説センター

担当部長 上田 敬

「巨大地震を考える」④

西村 卓也

京都大学防災
研究所教授

11月15日

臨時情報発信方法に課題

南海トラフ
地震臨時情報
が8月、制度
導入以降初め
て発表され、
その翌月、有
識者6人で構
成する気象庁
南海トラフ地
震評価検討会

委員に就任した。

専門は地殻変動。1994年以降、国土地理院のGNSS連続観測網が整備され、現在の観測点は約1300点。この30年のデータの蓄積により、人の爪や髪が伸びるほどゆっくりとした大地の動きが明らかにってきた。将来の大地震の震源域となるプレート間の固着域の推定や、大地震の兆候を知る手がかりとなるスロー地震の挙動もわかってきた。

南海トラフ地震については、100〜200年間隔で繰り返す歴史的、地質的証拠がある、ひずみが蓄積しつつあるデータがあるという二つの理由から「将来の発生がほぼ確

実な地震」と説明。そのうえで「地震やスロースリップが大地震を誘発した事例は世界的に報告されている。南海トラフでも周辺に影響を与える可能性は高く、地震活動が高まったときに社会に伝える臨時情報のようなシステムはあった方がいい」と述べた。臨時情報の課題として、東日本大震災の反省を受け、最大規模を盛り込み過ぎた震源域の運用や、世界の地震統計を利用した地震の発生確率の提示などを指摘した。

自身が観測を続けてきた1月の能登半島地震にも触れた。半島で異常な地殻変動が起き、周囲の活断層に地震を起こしやすくなる影響が及んでいることは、応力変化による評価から分かっていた。発信を続けてきたつもりだったところが、地震後の周囲の反応は意外なものだった。「知っていたのなら、なぜ教えてくれなかったのか」。臨時情報のような仕組みがあれば、広く社会に浸透したのではないかという思いがある。地震前から「海底活断層に地震活動が移れば、M7級が起ころうる」と西村さんらの警鐘をくり返し聞いていた報道の側として、社会への発信の難しさを考えさせられた会見だった。

毎日新聞社くらし科学環境部

垂水 友里香

石渡 明

前原子力規制委員会
委員

11月18日

規制の緩み許さない「たが」

9月に退任するまで10年、原子力規制委員会で地震など自然災害に関する分野を担当した。私はその最初の1年間、担当記者を務めた。

「かたい人だな」という印象は、今も変わらない。取材へのガードの堅さもそうだが、原発の60年超運転を可能にした制度変更は筋が通らないと1人で反対した意志の固さは世間に広く知られている。放っておけば緩もうとする原子力規制を締める「たが」のような存在だったのだろう。

岩石や地質の研究者だ。フランスの大学から金沢大、東北大を経て規制委に。旧原子力安全・保安院時代から前任委員の島崎邦彦さんに至るまで、原発の耐震審査では東京大の地震学者が大きな役割を担ってきた。異色の存在と言える。

人事選考に
当たる規制委

の事務方は、大学教授を辞めて委員に転じてもらうのは難しいかもしれないと案じていたが、直談判で快諾を得たという。仙台で東日本大震災を体験したことで、使命感を強く持つに至ったと会見でも述べていた。

在任中は、さまざまな負の遺産に苦勞したはずだ。原子炉から約250kmの至近距離に大活断層がある日本原子力発電敦賀原発(福井県)はその代表格。かつての米国のように「400m以内には活断層があつたらアウト」というルールがあれば話は早かったが、今も昔も日本にはない。近くに活断層はあつてはならないし、ないことになっているという暗黙の了解があつただけだろう。

苦肉の策として生み出した「原子炉直下の地盤がずれたらアウト」というルールを適用し、敦賀2号機は審査に不合格となった。当たり前の常識が通じない世界で道理を貫き通すのは容易ではない。「靴の裏からかゆいところをかくような感じ」。それでも、十分な時間をかけて審査をやりきったと断言していた。

そう言えば会見での表情はやや硬かった。もう少し笑顔も見てみたい。

共同通信社編集委員 鎮目 宰司

米大統領選 トランプ氏勝利 増田 理紗（NNNワシントン特派員）

生活者の不満すくい上げ ハリス氏の勢い、先細る

大接戦が予想されたアメリカ大統領選挙。大勢判明には時間を要するという大方の見方を覆し、トランプ前大統領は次々に激戦州を押さえていった。投票日の11月5日、私はフロリダ州で開かれたトランプ氏の集会を取材した。会場ではワインなどを片手に支持者らが選挙特番を楽しんでいた。会場の熱気が一気に高まったのは激戦州の大票田・ペンシルベニア州で勝利確実と報じられた瞬間。大統領選での勝利を確信したようにその日一番の歓声が上がリ、支持者らが喜び抱き合った。その勢いのままに翌6日午前2時半頃トランプ氏が登場し「第47代大統領という特別な榮譽を与えられたことに感謝する」と勝利を宣言した。

銃撃「神が救いに」涙も

ことし1月、アイオワ州の党員集会から本格始動した大統領選。このような選挙戦になることを誰が予想できただろうか。当初バイデン大統領

領とトランプ氏の戦いは「高齢者対決」「前回選挙の再放送」ともささやかれ、正直盛り上がりにかけていた。この1年間、激戦州を中心に全米を飛び回りトランプ氏を追い続けた。時には支持者に交じって午前5時過ぎから集会場に入る列に並び、幾度となく聞いたトランプ氏の登場曲「God Bless the USA」は今ではフルコーラスで歌える。そんな中起きたトランプ氏銃撃事件は大きな衝撃であった。その直後に行われた共和党大会で取材すると、支持者らは「神様がお救いになった」と話し、トランプ氏の姿を見て涙していた。事件をきっかけに共和党がひとつにまとまる瞬間を目の当たりにした。しかしその後、バイデン氏が選挙戦から撤退。ハリス副大統領を候補者として迎えた民主党大会もまた、一気に若返った新候補を前にこれまでにないエネルギーに満ちていた。テレビ討論会では、保守系FOXニュースさえも「ハリス氏の勝利」と評



支持者を前に演説を行い、「勝利宣言」したトランプ氏（11月6日/米フロリダ州/NNN提供）

価し、トランプ氏が討論会直後に突如プレスセンターで討論を自画自賛するという焦りを見せる場面もあった。ただハリス氏の当初の勢いは徐々に落ち着き、世論調査のきつ抗が続いた。

「トランプ氏のことは好きではないが、目の前の生活を良くするためにはトランプ氏に投票する」。取材で出会ったトランプ支持者のこの一言は、今回の選挙戦を象徴していると感じる。もちろんトランプ氏の熱狂的支持者の存在は健在だ。ただ、コロナ以降続く物価高などで有権者の生活への不満は大きく、民主党への失望からトランプ氏に投票先を変えたと話す人もいた。こうした中、ト

ランプ氏が打ち出したチップや残業代の非課税という分かりやすく実感できる経済政策は、多くの有権者の心をつかんだと感じる。現状への不満を巧みにすくい上げたことはトランプ氏勝利の一番の要因だろう。

人工妊娠中絶期待だおれ

一方、ハリス氏が全面に打ち出した人工妊娠中絶の権利をめぐる問題は、今回の選挙では民主党が期待したほどの起爆剤とはならなかった。激戦州を含む全米10州で大統領選と同日に中絶の権利の是非を問う住民投票が行われ、ハリス陣営は「住民投票が女性票獲得につながる」などと期待していた。しかし、実際には激戦州・アリゾナ州などでは住民投票で権利擁護派が多数だったのに対し、選挙の勝者はトランプ氏だった。民主党の期待とは裏腹の結果となった。

大統領に再び咲くこととなったトランプ氏。アメリカ国民が切望する「豊かな暮らしは戻るのか、再びアメリカは偉大になるのか。この国の変化と行く末を伝えていきたい。

ますだ・りさ▼2016年日本テレビ放送網入社 政治部で首相官邸担当 外務・防衛キャップ 国際部などを経て23年12月よりワシントン特派員 N.Y.市育ち 3度目の米国在住

日本被団協にノーベル平和賞 宇城 昇(毎日新聞社会部専門記者)

被爆者の証言、歴史に刻む 「核兵器なき世界」への一助に

私は広島を思い出したくないので
す——。

受話器の向こうから返ってきた言葉
を今も忘れることができない。

十数年前、広島支局の記者だった
私は、原爆孤児だった男性の消息を
追っていた。広島を中心街にあった
商店の息子さんと、学童疎開で生家
を離れていたため家族でただ一人、
原爆被害を免れていた。東日本で健
在であることを突き止め、取材依頼
の電話をした。

語らなかつた深い苦悩

男性は突然の申し出に戸惑ってい
た。私が話し終えると、静かな口調
で「お断りしたい」と返事があり、
続いて冒頭の言葉を口にした。

私は大きな過ちを犯した。相手の
心のかさぶたをはがしてしまったの
だ。家族も家も全てを失い、故郷を
離れざるを得なかつた少年が、どれ
ほどの苦勞を強いられたか。なぜ、
それが想像できなかったのか。先方



広島市の原爆ドーム前で、被爆証言者の話に耳を傾ける外国人来訪者たち(4月26日/筆者撮影/毎日新聞社提供)

の知人らに仲介してもらうなど、も
っと丁寧なアプローチができたはず
だった。懸命に戦後を生きてきただ
ろう元孤児の心を残酷に切りつけた
自身の軽率さが許せなかつた。

今年のノーベル平和賞が日本原水
爆被害者団体協議会(日本被団協)
に贈られることが決定し、ノーベル
賞委員会は「核のタブー」の確立に
貢献した被爆証言の力を称賛した。

想像を絶する体験をし、心身に刻ま
れた傷を抱えて生き抜いてきた被爆
者の方々は「二度とこんなことがあ
ってはならない」との思いでつらい
記憶を語り、記録を残してきた。そ
の努力には敬意を表するしかない
し、ノーベル平和賞という形で報わ
れたことに深い感慨を覚える。

一方で、幾十万もの語られてこな
かつた苦悩がある事実を忘れてはな
らないと思う。くだんの原爆孤児の
体験は、私にもう少しの配慮があれ
ば証言を引き出せたかもしれない。
取材記者として至らなかつたばかり
に歴史に埋もれさせてしまった。

「被爆者のいない時代」が迫って
いると言われるが、厚生労働省の統
計では被爆者健康手帳の所持者は全
国に10万人超いる。このうちのどれ
だけの語りが証言や手記などの記録
として残っているだろうか。被爆体
験の継承が危機だと憂うならば、私
たち報道する側は一人でも多くの体
験を歴史に刻み、未来に残すために
一層の努力をしなければならない。

受賞は「世界への警告」

今回の平和賞を機に、被爆証言を
報道する意味について改めて問い直
したいと思う。証言を取材して伝え
ることが目的化し、新事実を掘り下

げることもなく上書きするだけにな
ってはいないか。語られてこなかつ
たことの事情や背景に迫るような報
道ができているか。

原爆報道とは、再び核兵器が使わ
れることがない世界を築くための一
助となるべきものだ。核兵器禁止条
約が2017年に国連で採択され、
核兵器を国際法で違法とする法的な
取り決めはできた。世界の半数以上
の国が賛同しているにもかかわらず、
今も核による威嚇は世界でやま
ず、核廃絶・核軍縮は厳しい状況に
ある。「核兵器なき世界」の実現に
向けた努力は「道半ば」の状況でノ
ーベル平和賞が被爆者に授与される
意味は、「ヒロシマ、ナガサキを忘
れてはならない」という世界に向け
た警告なのだ。

あの夏の広島にいた私の祖母と父
は、幾つかの偶然が重なって命をつ
ないだ。既に2人が他界した今、家
族の体験を受け継ぐ当事者として、
また「唯一の戦争被爆国」で報道の
現場にいる一員として、何ができ
るかを自問している。

世界が、自身が問われるのは、こ
の先の行動だ。

うじょう・のぼる▼1994年入社
都宮支局 広島支局 大阪本社社会
部 科学環境部 広島支局長などを経
て 2023年5月から現職

元大阪地検検事正性暴力事件

石原 知佳（共同通信社大阪社会部）

被害者会見、検事の覚悟

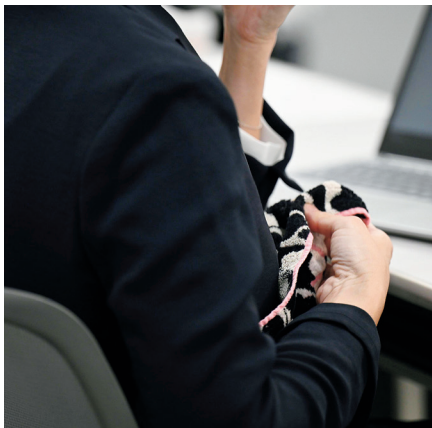
事件後、誹謗中傷も受け

元大阪地検トップが準強制性交罪に問われた事件の初公判が10月25日、大阪地裁で開かれた。事件の衝撃に加え、閉廷後に現職検事の被害女性が記者会見を開き、さらに注目を集めた。

「6年間、苦しんできた」

「被害から6年間、本当に苦しんできた。大きな権力との闘いで、強い恐怖や孤独、事件が闇に葬られるかもしれないという不安も大きかった」。女性によると、事件後、組織内では女性への誹謗中傷があった。会見に踏み切ったのは、こうした行為に立ち向かう意味もあった。カメラの前で涙をこらえ、声を震わせながらマイクに向かう姿からは、性犯罪を含む多くの事件と対峙してきた検事としての覚悟がにじんでいた。

初公判で全面的に起訴内容を認め「被害者に重大で深刻な被害を与えてしまい、深く反省し謝罪したい」と述べた元検事正・北川健太郎被告。



初公判閉廷後に記者会見する被害者の女性（10月25日／共同通信社提供）

検察側が指摘した犯行態様は悪質なものであった。冒頭陳述によると、被告は同僚らとの懇親会後、泥酔状態の被害女性が乗るタクシーに強引に同乗し、自身の官舎に連れて行き性的暴行。意識が戻った女性が暴行をやめるよう伝えたのに聞き入れず、犯行を続けた。事件後には「事件が公になれば自死する。検察庁に対し強烈な批判が出て仕事にならなくなる」時効が来るまで食事をごちそう

する」と女性に口止めした。

女性会見で、検事を目指した理由を語った。かつて電車内で強制わいせつ被害に遭ったが逃げるだけで精いっぱいだったこと、ストーカー被害を警察に訴えたがまともに捜査してもらえなかったこと。被害を受けても声を上げられない、声を上げても届かない……。そんな体験をきっかけに、性犯罪被害者に寄り添い、力になりたいと思ったのだという。

女性は当初「検察を守らなければならぬ」と沈黙していたが、「処罰されるべき人間が処罰されていない」と苦しむようになった。心的外傷後ストレス障害（PTSD）が悪化し、その後、休職。自身を取り戻すにはアイデンティティーを守り、被告に罪と向き合わせ、同じような被害者を二度と生まないようにすることだと覚悟を決め、被害を申告した。

うわさ流した同僚告訴

会見では、検察内部でセカンドレイプに当たる名誉毀損があったと訴えた。被告と親しい職員が捜査情報を漏らしたり虚偽告訴だとのうわさを流したりし、これを元に誹謗中傷する検察官がいたという。「性犯罪者がどれほど苦しんでいるのか誰よ

りも分かっているはずの人たちがうわさに踊らされ、被害者を傷つける状況が残念でならない」

女性はこの職員を、国家公務員法違反や名誉毀損などの疑いで大阪高検に告訴・告発した。

「今後も検事続けたいか」。記者のどんな質問にもはっきりと返していた女性は、会見の終盤で問われ、少し考える様子を見せた。「検事の仕事は私の生きがい。誇りを持っているし、一人でも多くの方に寄り添いたい気持ちもある」。こう答えた一方、「検察庁の対応などで不安が解消されれば続けられるかもしれないし、そうでないかもしれない。今後次第です」と揺れる心中を明かした。

北川被告の第2回公判は、この原稿が載った会報が発行される12月10日に行われる。あと数回は公判が開かれる見通しで、同僚に対する告訴・告発の扱いも今後決まる。女性が職を辞さずにすむかは、公判の行方や検察の対応の在り方にかかっている。

いしはら・ともか ▼2006年入社 岡山支局 大分支局 京都支局などを経て 18年から大阪社会部

新・列島報告 85 神奈川県
横浜DeNAベイスターズ 日本一

「最大の下克上」に歓喜 データ駆使、人気球団に

松村 祐介
(神奈川新聞社運動部記者兼デスク)

プロ野球の横浜DeNAベイスターズが1998年以来の日本一を成し遂げた。日本シリーズは横浜スタジアムで2連敗を喫したものの、敵地で3連勝して勢いづき、戻ってきた本拠地で大勝した。まさに「史上最大の下克上」と呼ばれるにふさわしい快進撃だった。

記者4人、カメラ3人体制

普段デスクとして会社に詰めている私も日本シリーズは全試合、取材班に加わった。横浜スタジアムでは記者4人とカメラ3人、福岡は記者4人、カメラ1人の体制。重厚な布

陣のスポーツ各紙に負けるわけにはいかないと、見開きの運動面と社会面を連日埋めた。

レギュラーシーズンは3位だったベイスターズ。短期決戦は三浦大輔監督の采配が次々と的中した。主将の牧秀悟内野手が連敗直後に緊急ミーティングを開いてチームの士気を上げた。脚の故障で万全の状態ではないエース東克樹投手が第3戦に先発してから投打ががっちりかみ合った。最終第6戦では5年ぶりに古巣復帰した筒香嘉智外野手が先制弾。

かねて「勢いのDeNA」と言われてきたが、日本シリーズは全てのピースが鮮やかにハマったと言える。

白星を重ねるにつれて社内全体が慌ただしくなった。運動部でも日本一の予定稿や号外、特集制作の準備など一気に作業が押し寄せた。福岡から横浜に戻った第6戦が降雨中止となり、猶予期間が一日生まれたことが救いだっただけ。

ファンのボルテージも高まっていた。福岡で熱戦を繰り広げていた頃、パブリックビューイングが行われた横浜スタジアムには連夜多くのファンが詰めかけた。無人のグラウンドを囲みながら声援を送る光景に、球団関係者も「異様な光景」と驚いていた。



26年ぶりの日本一を成し遂げ、胴上げされる横浜DeNAベイスターズの三浦大輔監督(11月3日/横浜スタジアム/神奈川新聞社提供)

2000年代の低迷期はもう遠い過去の話だ。11年11月にI.T大手「ディー・エヌ・エー」が球団を保有すると、I.T企業らしく、データを駆使したチーム戦略や事業に率先して注力した。1998年のリーグ優勝、日本一を知るファンを呼び戻そうと、趣向を凝らした企画を次々と打ち出したことに加え、横浜スタジアムの買収で経営の黒字化に成功。コロナ禍の期間を除けば観客動員数は右肩上がり、今季は過去最多の235万8千人。今や12球団で4番目に多い人気球団になった。

チーム強化の取り組み熟し

チーム強化についても、ここ10年間のドラフト会議で即戦力選手を獲

得し、選手層が厚くなった。国内フリーエージェント(F.A)権を取得した主力選手が他球団に移籍してきた先例を踏まえ、近年は大型の複数年契約を結ぶケースも増えてきた。今回の日本一はこうした数々の取り組みが熟した成果とも言える。

日本一の夜は取材で慌ただしく過ぎて、一番盛り上がりを実感したのは翌朝のこと。売れない時代に、神奈川新聞がコンビニ店から消え、社内にも在庫がほぼない状態になった。街中で球団応援歌が流れ、多くの百貨店でセールが行われた。浜銀総合研究所によると経済効果は75億円以上に及んだ。

2度にわたる特集面、号外の作業を終えてようやく一区切りがついた。26年ぶりとなると、これほど大変なのかというのが率直な思いである。昨夏の全国高校野球選手権大会でも慶応が107年ぶりの全国制覇を果たしたが、携わった記者の経験は何ものにも代え難い。南場智子オーナーは「来年は絶対にリーグ優勝」と意気込む。四半世紀先ではなく、近いうちにあると信じて備えたい。

まつむら・ゆうすけ▼2005年入社
編集局報道部で県警、遊軍、県政、横浜市政などを担当 18年1月から運動部

プラザ合意の日本側攻防 為替に振り回された日々

最近は何安、かつては円高。為替に右往左往する日本は、為替に振り回された自らの記者生活とも重なる。

日米独英仏の先進5カ国（G5）がドル高是正でスクラムを組んだ1985年9月22日のプラザ合意。為替担当になったばかりの記者は、事前

に大舞台の到来など知る由もない。ニューヨーク・プラザホテルでのG5合意。東京外国為替市場で円相場は、直前の9月20日の終値1ドル＝242円ちょうどから、秋分の日を

はさんだ9月24日には一時228円台まで急騰した。大台替わりの円高だが、為替市場ではドル買いの力が根強かった。

◆東京市場「Fedが出た」

石油など輸入業者が値ごろ感から、ドル買いの注文を入れたからである。円相場が230円台に押し戻されてはいけない。政府・日銀が必死に円

買い・ドル売り介入に出たが、この日の終値は230円10銭。

そうこうするうち同年10月7日には、東京市場で聞きなれないネームが「Fedが出た」。Fedとは米連邦準備理事会（FRB）傘下のニューヨーク連銀のこと。各国当局は自国市場で介入するのが大前提なのに、米国の通貨当局が東京市場でドル売り・マルク買いの介入に動いたのだ。耳打ちしてくれたのは、大手米銀の伝説的為替ディーラーだ。

日銀クラブ詰めだったので、確認に走った。日銀で介入の第一線に立っていたのは、当時の外国局為替課である。大熊義之課長はあつさりとして事実を認めた。米当局、東京に現ると明かすことによって、介入効果を高めるアナウンスメント効果を狙ったのだらう。

プラザ合意で決めたドル高是正を確実なものにするため、次々と新し

の為替介入が繰り返された。先ほどの米当局の介入は、東京市場で当時のドイツマルクを用いた「他通貨・他市場介入」である。24時間介入体制を誇示したといってもよい。

◆「お土産話を」と大場財務官

日本側のプラザ合意の立役者は大場智満財務官である。ニューヨークのG5には竹下登蔵相と澄田智日銀総裁が出席したが、竹下蔵相が発言したのは2回くらい。もっぱら大場財務官が日本代表として発言していた。西独連銀のペール総裁は蔵相でなく、中央銀行総裁でもない財務官がなぜ、と訝しんだ様子だった。

大場氏は茶目つ気たつぷりの方で、市場の猛者たちの扱いを心得ていた。「せっかくお集まりいただいたのだからお土産話をしないと」。プラザ合意の後、金融機関の市場担当者



滝田 洋一

1981年日本経済新聞社入社
金融部 チューリヒ支局 経
済部編集委員 米州総局編集
委員 特任編集員など 4月
までテレビ東京「ワールドビ
ネスサテライト」解説キャス
ターも務めた 現在 名古屋外
国語大学特任教授 リーマン
・ショックに伴う世界金融
危機の報道で2008年度ポー
ン・上田記念国際記者賞受賞
著書に『日米通貨交渉』『世界
経済大乱』『世界経済 チンケ
ームの罠』など

「プラザ合意ではドルに対して他の先進国通貨を10%強くすることを決めました。円は特別なのでさらに5%強くすることに」。この大場財務官の話の後、大熊課長は続けた。「私の名前は大熊。ドルに対してはもっとベア（弱気）です」

15%強の円高なら1ドル＝200円あまりとなる勘定。ドルにもつと弱気となると、円は200円をも突破しかねない。携帯電話などない時代のこと。話が終わるや否や、「これは本気だ」と受け止めた市場担当者はわれ先に公衆電話に殺到した。

G5会議の秘密合意をそれとなくささやく形で、マーケットの相場観を円高方向に誘導する。これもまた為替市場をめぐる情報戦であった。プラザ合意をめぐる各国のやり取りについては、船橋洋一氏の名著『通貨烈烈』がある。マーケット記者として、自分なりに舞台裏を知り



G5が開かれたニューヨークのプラザホテルの正面玄関には、プラザ合意を記念して5カ国の旗が飾られている
(1995年3月2日/共同通信社)

たいと思っていたが、思わぬ形でその希望がなかった。駐米日本大使館の公使として、大場財務官と米財務省の窓口となっていた内海孚氏(後に財務官)から、米国側とのやり取りの記録(応接録)の提供を受けたのである。

応接録は拙著『日米通貨交渉』でも紹介したが、内海氏によれば、米国のマルフォード財務次官補は実際の介入戦略について、詳しく論じている。①ドルの上昇をストップするような介入。②ドルが強くなったときはそれに抵抗して、弱くなったときはそれを後押しするような介入。③ドルを弱くするようなバイアスのかかった介入——といった具合である。

具体的にはプラザ合意後の当初3

日程度の間、総額40億ドル程度の介入を行ってドル安に誘導し、その後しばらく様子を見て、ドル高への戻し局面で再度大量介入を行ってはどうか。そんな考えが共有された、近藤健彦副財務官(当時)はいう。

◆ルーブル？ワシントン？

ドル高是正を狙ったプラザ合意に幕が引かれた時期については、見解が分かれるところである。当面の水準での為替相場安定で一致した87年2月22日のルーブル合意を挙げると、きもある。ルーブル宮殿で開かれたG7会議での為替安定合意である。

だが米独の対立からこの合意は短命に終わり、87年10月19日のブラックマンデー(米国発の世界同時株安に見舞われたことは周知の通り。と言いたいところだが、当時まだ生まれていなかった記者たちが、今や取材の第一線の主役である。

もう少し話にお付き合いいただくと、プラザ合意によるドル高是正の路線に最終的に幕が引かれたのは、95年4月25日にワシントンで開かれたG7会議である。このときの共同声明で、ドル相場の秩序ある反転がうたわれた。反転は「リバーサル」である。

この声明にもかかわらず、市場は反応薄。同年4月19日の東京市場で

円相場が1ドル＝80円を戦後初めて突破し、79円75銭の最高値をつけた後も、円の先高観が支配的だった。日米間には貿易摩擦があり、クリントン政権は円高・ドル安路線との思い込みが強かったのだ。

実は同年1月に就任したルービン財務長官が「強いドルは米国の国益」と語るなど、米政府の方針は大きく転換していた。だが、マーケットは慣性の法則に支配される。

市場参加者の間では「1ドル＝50円の到来」がまことしやかに語られた。しかし当時の大蔵省の介入担当者には「円高は明らかにオーバーシュート(行き過ぎ)」と感じていた。ほかでもない。1ドル＝50円で日本の名目GDP(国内総生産)をドル換算すると、日米のGDPが逆転してしまうからだ。

こうした判断から、政府・日銀はあえて介入を手控える作戦にでた。円売り介入を実施したのは同年4月18日までで、4月19日は介入していない。市場の円買い・ドル売りが出尽くすのを待ったのである。

◆「ミスター円」のセタ介入

満を持して円売り介入の反転攻勢に出たのは、ご存知の通り(とまた言ってしまった)、やがてミスター円の異名をとる榊原英資・大蔵省国

際金融局長(後に財務官)である。日米が同時に利下げしたタイミングをとらえて、日米協調の円売り・ドル買い介入に打って出たのだ。7月7日のセタ介入である。

介入が効果を発揮するのは、金融政策と連動した協調介入。そんなセオリを地で行く展開だ。為替ディライターの集まりで「夏休みをとられるなら携帯電話を忘れずに」と介入をほのめかすなど、榊原国金局長は文字通りトリックスターだった。ミスター円のひとりで、為替相場が大きく動くのを目の当たりにして、メディアは彼の一挙手一投足を追った。

人様のことはおぼろげに言っている。円高是正がだいぶ進んだ96年11月のこと。「僕らはこれ以上、円安誘導しようなんて考えていないよ」。局長室での取材中に榊原氏がもらしたひと言を新聞のコラムで紹介したところ、その発言に円相場はたちまち2円以上も急騰した。大きく値が飛ぶ為替のボードをみて、口先介入の威力に感じ入ったものだ。

記者は取材先との程よい距離が大切。その通りではあるが、マーケットのうねりを目にする、つい前のめりになってしまう。同じことは2008年9月のリーマン・ショックのニューヨークでも経験したが、紙幅が尽きた。それはまたの機会に。

私が会ったあの人

美谷島邦子さん 日航機墜落事故の遺族

「健と歩んでいく」覚悟胸に

田中 美恭（共同通信社）

1985年の日航ジャンボ機墜落事故の遺族、美谷島邦子さんとの出会いは2005年にさかのぼる。遺族らでつくる「8・12連絡会」の事務局長でもある美谷島さんを前にした私は、当時入社5年目。先輩記者の隣で緊張して小さくなっていた。

美谷島さんは、今でも私にとっ

ては近寄りがたい存在だ。9歳の息子の健君を事故で亡くした悲しみを胸に、空の安全や命の大切さを訴える講演活動を全国各地で精力的に続けている。国土交通省、航空業界関係者、メディアとも信頼関係を築き、他の事故や災害の遺族とも交流を深めてきた。

■どんな出会いも大切に

幾重ものつながりの輪の中心に美谷島さんがいるのは、連絡会の「顔」を長年務めてきたからというだけではないのだろう。どんな出会いも大切に、時には手を差し

伸べてくれるような優しさが美谷島さんにはある。そして関わりを持った誰もが「事故の記憶を伝え続ける」責任の一端を担うのだと感じる。

群馬県上野村の墜落現場「御巢鷹の尾根」に初めて登ったのは事故から丸20年、05年8月12日の慰霊登山の取材の時だ。花束を手にした遺族らが途切れることなく尾根を目指していた。至るところに立つ墓標に言葉を失った。

乗客乗員524人のうち520人が死亡。死者数は単独事故では世界の航空史上最悪。奥深い山中で「死の重さ」がのしかかってくる気がした。その後、長らく事故現場に足が向



美谷島邦子さん（2018年7月/群馬県上野村の慰霊の園にて/筆者撮影）

かなかった。美谷島さんからは毎年、連絡会の会報「おすたか」が届いた。英文記者として日々の業務の忙しさに追われ、時間が過ぎていった。

2度目の登山は18年。子ども向けに企画された「日帰り御巢鷹山学習ツアー」に同行した。その約1カ月前に、美谷島さんが健君の母校で行う講演が予定されており、行きたいと思いながら、記事にできるかは自信がなかった。

■「怖い」から「優しい」山に

「記事はいいんです。聞きに来てください」。美谷島さんはそう言っ

て、ツアーの参加も含め、私の背中を押してくれた。小学生やその保護者らと尾根に登った私は、不思議な感覚に襲われていた。かつては「怖い」とさえ感じた山が、さまざまな人が集い、命の大切さを感じられる「優しい山」になっていった。

突き動かされるように、企画記事を書いた。美谷島さんに伝えようと、「健に届くような文面です」と言ってくれた。

美谷島さんの講演を聞くと、いつも胸が締め付けられるような気持ちになる。健君は大阪の親戚に会った

めに羽田空港から一人で飛行機に乗り、事故に遭った。夏休みにプールで25メートルを泳げるようになった。ご褒美の冒険旅行のはずだった。甲子園観戦を楽しみにしていた少年。見つかった遺体は右手と胴体の一部だけだった。

深い自責の念が美谷島さんを苦しめた。「健ちゃんといつも一緒」と思えたのは5年後。息子のことを、子ども向けの講演で話せるようになるまでに約30年かかった。

「事故がなかったら、違う人生を過ごしていたかもしれないね」と言われたことがある。でも私はこの人生しかないし、健と歩んでいく」

18年に取材したときの美谷島さんの言葉だ。この覚悟が生まれるまでの葛藤に思いをはせると、自分が記者として向き合っているものの重さを感じる。私なりに何ができるかを考え、前に進まねばと思わせてくれる言葉だ。

（たなか・みや 2001年入社
国際局海外部で英文記者）

次号は田中さんとワシントン特派員の時期が重なっていた廣田孝明さん（北海道新聞社）にバトンが渡ります。

名古屋刑務所 視察 ユニットごとの処遇見学

11月1日／参加者22人



「見て見ぬふりは同罪です」。名古屋刑務所の職員棟から受刑者がいる棟に移動するときに、不祥事防止を呼びかける標語が目に入った。職員による受刑者への暴行が問題となった名古屋刑務所に11月、日本記者クラブの視察で訪れた。犯罪傾向が進んだ刑期10年未満の受刑者を収容する同所は、現在700人が受刑生活を送る。罪名は窃盗や詐欺の財産犯、薬物犯が7割を占め、平均入所回数は4回となっている。

問題発覚後、再発防止の一環として、処遇が難しい受刑者がいる棟では、職員が装着型カメラを使用する。職員の指示に対して受刑者が「お前らの指示は聞かない」と抵抗し、職員が「調子に乗るのめたいがいしろ」と声を荒げる。そんなやり取り

に対して、職員はどのような対応をするべきだったか、映像を見ながら事後指導してるといふ。

また、受刑者の特性に応じた処遇ができていなかったことが問題の要因にあるという反省から、三つのユニットに分けた処遇を導入。高齢者、発達に課題を有する者、薬物依存の者と、特性に応じたプログラムを少人数で実施する。高齢者のユニット（写真）では、受刑者が機能向上トレーニングとして、折り紙の作品を黙々と作っていた。薬物依存のユニットでは、車座になった受刑者が「100万円あったらどう使う？」などのテーマで話し合う様子が見られた。ユニット処遇の導入後、コミュニケーションの機会が少なくことで認知症が急速に進む状況や、発達上の特性がある受刑者が他者と衝突して規律違反を繰り返す状況が改善しつつあるという。

ユニットに所属する受刑者は全体のうち少数にとどまるが、吉弘基成所長は「拘禁刑の導入に向けて、一つのモデルケースになりうる」と強調する。「懲らしめ」から「立ち直り支援」へ。刑務所は生まれ変われるのか。今後も注視していきたい。

中日新聞社教育報道部 芳賀 美幸

マイBOOK マイPR

『比翼の象徴 明仁・美智子伝』全3巻

井上 亮（日本経済新聞出身）

平成の天皇・皇后の軌跡

私は「象徴天皇」を分割して解釈している。「天皇」は血統で決定しているが、「象徴」であるかどうかは自明ではない。人々がそう思わなければ象徴たり得ない。まさに国民の総意で成り立っている。

明仁天皇はそれを強く意識し、長年の考察と経験をもとに美智子皇后と両輪の「象徴の私たち」を創始した。天皇は政治的、経済的な活動はできない。なし得るのは「精神的な支援」である。「両陛下訪問後、見える風景が変わった」という被災地の言葉が心に残る。



岩波書店 上・中巻は各3,520円、下巻は3,960円

『日本財団は、いったい何をしていいのか 第九巻 平和の希求』

鳥海 美朗（産経新聞出身）

ウクライナ、ミャンマーに焦点

日本財団の業績を追跡するシリーズ本の第九巻は、ロシアによるウクライナ侵攻によって生じた多数の避

難民支援と、軍事クーデターによって国情が一変したミャンマーの救済に腐心する活動に焦点を当てた。ウクライナで真っ先に繰り広げられたのが、障害者を救出し安全な場所に移すプロジェクト。政治的には中立の立場に立ち、人道支援に徹する日本財団の姿勢を象徴する事例だ。



工作舎 2,200円

『ゾルゲ事件80年目の真実』

名越 健郎（時事通信出身）

公開資料基にスパイ活動分析

旧ソ連の大物スパイ、リヒャルト・ゾルゲについては、日本では情報が出尽くしたが、ロシアでは今世紀になつて情報公開が進んだ。ゾルゲが送った電報や書類が公開され、全容判明を受けて、ゾルゲのスパイ活動を再構成してみた。独ソ開戦や日本の南進に関する通報に加え、プーチン体制下で英雄として神格化されていること、上海での知られざる諜報活動、機関摘発後の混乱を取り上げた。若い記者にはゾルゲ事件をぜひ知ってもらいたい。



文藝春秋 1,210円

■会議報告

●第458回会報委員会

(11・6 大会議室)

12月号の編集と来年3月号に掲載する「3・11企画」を協議した。

出席 榎原委員長、志賀、森、佐藤、萩原、勝田、稲澤、倉重、二村の各委員。

●第555回企画委員会

(11・12 会場&オンライン)

来年5月の総会記念講演会の講師、今後のゲスト候補について議論した。来年の予想アンケート問題作成の担当分野も決めた。

出席 藤井委員長、行方、井田、西山、橋本、猪熊、大内、菅野、辻本、高橋、乾、加納、森田、杉田、小林、森、早川、山口(哲)、山下、出川、川戸、播摩、小栗、石原、倉澤の各委員。

●第567回会員資格委員会

(11・13 小会議室)

12月1日付入退会を審議、理事会に答申した。

出席 滝鼻委員長、佐々木、山本、高橋、居石、山口、中村、森安、武井の各委員。

●第718回理事会

(11・13 10階ホール)

①2024年度上期の事業報告②同期の決算③電子取引データの訂正及び削除の防止に関する事務処理規

定について事務局が報告した。

出席 前田理事長、沢井副理事長、江木専務理事、滝鼻、藤井、榎原、窪田、鎌田、齋田、吉原、曾山、米田、伊佐治、内藤、小林、瀬尾、神田の各理事、山口監事。

土曜記者ゼミ

―丁編④―

日経ビジネスジャーナリズムの実践例

11・9／講師…並木亮 日本経済新聞社編集先端ビジネスセンター戦略コンテンツグループ記者／出席…会場10人、ウェブ23人

■地震可視化のコンテンツ制作

並木さんは、関東大震災以降に起きた地震を3Dで可視化した「地図でみる『地震列島』日本」を制作した。主に気象庁の公開データを使用。今後もアップデートできる更新型のコンテンツにするため、データ処理できるプログラムを組んだと説明。だが、複数のデータソースを組み合わせたためデータ処理が複雑だった。「同じ作業を別の人がやるのはかなり大変。処理の過程を文書として残し、それに紐づく形でプログラムを残したことが大きいポイント」だと話した。

また、QGISでの地図データの分析について、Pythonのライブラリ「GeoPandas」を紹介した。(事務局)



朝晩の冷え込みが一段と厳しく感じられる季節。仕事帰りのサラリーマンのお供には、冷たいビールよりも、日本酒を

薦めたい。「熱かん」を喉に通せば、冷えた体を芯から温めてくれる。

福島県は近年、全国有数の酒どころとして知られるようになった。福島県の日本酒は全国新酒鑑評会で2012酒造年度から2021酒造年度まで、新型コロナウイルス感染拡大の影響で金賞を選ばなかった2019酒造年度を挟み、都道府県別の金賞受賞数で9回連続日本一に輝いた。2022酒造年度は5番目、2023酒造年度は兵庫県(19銘柄)に次ぐ2番目(18銘柄)の多さで、酒造りの技術力の高さを示している。

筆者が日本酒の味を知ったのは2014年、福島県会津坂下町に拠点を置く支局に赴任してからだ。町内には、首都圏でも人気の高い「飛露喜」を製造する廣木酒造本店、「天明」や「一生青春」で

日本酒のススメ

知られる曙酒造、「學十郎」を造る豊國酒造の三つの蔵元がある。会津の酒を豊富に取りそろえる酒販店やリーズナブルな価格で酒を味わえる日本酒バーもあった。

町の先輩方に指導を仰ぎ、ラベルに書かれた純米吟醸酒、本醸造酒などの意味を覚えることから始めた。「純米」と書かれていれば原料に醸造アルコールは含まれていない。個人的には純米酒は飲み口が良く、二日酔いになりにくかった。次は精米歩合。米の表層部分を削って残った米の割合を示す値で、60%以下は吟醸、50%以下で大吟醸と表示できる。ただ、蔵元によっては50%でもあえて吟醸と名付けられる場合もあり、蔵元のこだわりが見えてくる。

原料に使う米の種類や製造方法によっても、辛さや甘さは変化する。地域性や各蔵元の個性などもあり、奥が深い。酒席が増える季節。福島県産の日本酒を見かけた際には、ぜひ試してみてほしい。

福島民報社東京支社報道部編集主任 佐藤 庄太

レストラン*価格は全て税込みです

予約電話 和食 3503-2723 洋食 3503-2766・2731

和食 十二月お献立(12/27まで)

先付前菜：市田柿柚べし、海老手毬寿し、雪輪レンコン津軽漬など 馬上杯：いくら醤油おろし 柚子 椀盛り：雲子豆腐 梅麴など 造り：鮮薄造り 焼き物：銀鱈西京焼き 炊き合わせ：京芋、鴨、梅人参など 食事：梅しそそば デザート：おしるこ(5,500円) (板長：薫田勝)

洋食 季節のおすすめコース(12/27まで)

ズワイ蟹とクスクスのサラダ ガトー仕立て、ほうれん草のポタージュ、シチュードビーフ 温野菜添え、苺のムースケーキ、コーヒーまたは紅茶、パンとバター(4,400円)。ランチ、ディナーともに9階レストランでもご提供します。(シェフ：佐藤和治)

忘年会・新年会 宴会プラン 1月31日まで

年末年始の会合にお使いいただける宴会プランを用意しました。生ハムのシーザーサラダ、チキンカツレツ、白身魚のポワレなど9品をご提供します。お一人3,300円(税込み)です。550円の追加でアラスカ特製野菜カレー(ライス付)、1,430円の追加で飲み放題(2時間)をお付けできます。別途、部屋代がかかります。予約、お問い合わせは03-3503-2724まで。

年末年始 閉室のお知らせ

レストラン、ラウンジの年内営業は12月27日(金)までです。事務局も28日(土)から1月5日(日)まで閉室します。新年は1月6日(月)から事務局、ラウンジ、レストランともに平常通りオープンします。

訃報

高尾義彦さん(毎日新聞出身、79歳)が11月12日に死去されました。ご冥福をお祈りいたします。

訂正して、おわびします

11月号14ページ「書いた話書かなかった話」で「当時の課長は大森義夫氏(のちの警察庁長官)」とあるのは、「(のちの内閣情報調査室長)」の誤りでした。

今後の行事予定(12/2現在)

24㊥	14:00～15:00 10階ホール ノーベル平和賞受賞 日本原水爆被害者団体協議会 会見
1月 21㊥	13:00～14:30 9階会見場 「2025年経済見通し」① 河野龍太郎 BNPパリバ証券チーフエコノミスト

クラブの電話 ダイヤルイン

- 和食レストラン(9階) …… ☎3503-2723 ●会員事務 …… ☎3503-2727
- 洋食レストラン(10階) …… ☎3503-2766 ●経 理 …… ☎3503-2728
- 貸室予約、宴会打ち合わせ …… ☎3503-2724 ●クラブ行事への申し込み …… ☎3503-2722
- 受 付 …… ☎3503-2721 ●会見申し込みアドレス …… kaiken@jnpc.or.jp

会員現況

- 法人会員：126社 ●基本会員：711人 ●個人会員：1,012人
- 法人・個人賛助会員：53社・112人 ●特別賛助会員：99人
- 名誉・功労会員：12人 ●学生会員：77人 計179社・2,023人



新しい個人D会員



金平

茂紀

1977年東京放送(現TBS)入社。モスクワ支局長、ワシントン支局長、「筑紫哲也NEWS23」編集長、報道局長、「報道特集」キャスターなどを歴任。

テレビ報道の仕事を中心に47年余。メディア環境の激変のなか、この仕事に卒業はないので現場でまたお目にかかりましょう。

新年互礼会 1月24日午後6時から

新年互礼会員懇親会を1月24日(金)午後6時から10階ホールで開催します。当日は「2024年予想アンケート」の結果発表ならびに最高得点者の表彰が行われます。また、会場では「2025年予想アンケート」も投票できます。ふるってご参加ください。

会費の領収書をお送りします

確定申告のために会費の領収書が必要な方は、会員事務担当の杉本(電話03-3503-2727)へご連絡ください。領収書は、引落しごとに発行、1月または12月に1年分をまとめて発行をお選びいただけます。

日本記者クラブ賞・同特別賞の推薦を

日本記者クラブ賞・同特別賞の募集が始まりました。締め切りは1月31日(金)です。

■日本記者クラブ賞

取材、報道、評論活動などを通じて、ジャーナリストとして顕著な業績をあげ、ジャーナリズムの信用と権威を高めた個人を顕彰します。会員または法人会員社に属する現役ジャーナリスト個人を対象に、個別のスクープではなく、最近数年間の業績が顕著であることを重視して選考します。クラブ会員であれば推薦できます。

■日本記者クラブ賞特別賞

原則として会員以外のジャーナリズム活動を顕彰しますが、会員社の取材班・番組班などチームの業績も対象となります。また外国人や故人も対象です。クラブ会員だけでなく日本新聞協会あるいは日本民間放送連盟の加盟社に属する方であればどなたでも推薦できます。



両賞とも、日本記者クラブのウェブサイトにある応募フォームに必要事項を入力の上、参考資料を事務局に提出してください。https://www.jnpc.or.jp/award2025

詳細は事務局の杉本(03-3503-2727)へお問い合わせください。

会報委員会

委員長＝榊原 智
委員＝荒川 康一 稲澤 裕子 勝田 洋人
倉重 篤郎 古賀 靖典 佐藤 庄太
志賀 英樹 二村 伸 萩原 豊
森 一徳

(事務局：本庄五月 西村志織)

☎03-3503-2754 FAX 03-3503-7271

撮影：片岡 航希（読売新聞東京本社写真部）



米大リーグ。今季50号となる2ランを放ち、鳴りやまない拍手に応えるドジャースの大谷翔平選手＝9月19日、米マイアミ

数学より歴史の授業

米大リーグ・ドジャースの大谷翔平選手が9月19日、マイアミでのマリーリンズ戦で、大リーグ史上初めての「50本塁打、50盗塁」を達成したときのひとコマだ。

私が着目したのは写真の左側。「I SKIPPED MATH TO WATCH HISTORY! OHTANI 50 / 50」私は、大谷の50・50という「歴史」を目撃するために「数学」の授業をさぼりました！と書いた紙を掲げているファンの表情である。大谷選手に憧れた子どもは、午後の数学の授業を抜け出し、球場に駆けつけたのであろう。何とも賢い選択ではないか。

その眼差しを見て胸が熱くなった。小学校から高校にかけて、3人の人物に憧れた経験が甦ったからだ。小学校4年までは徳之島出身の朝潮太郎（高砂部屋）に憧れ、相撲取りを目指した。高砂部屋の近くに住む叔母に相談したところ、その場で投げ飛ばされ「無理ね」と引導を渡された。

次は西鉄の中西太に憧れ、プロ野球選手を目指した。小学校6年の卒業文集には具体的に「近鉄の1塁手になる」と綴った。西鉄や巨人は大物で占められているので、弱小球団近鉄の1塁手なら、という打算が働いたのだ。

田園地帯の中学校の野球部に入部。2年の秋の新人戦からレギュラーになった。町の学校からやって来たT先生が監督に就くと、管理野球に変わった。私のポジションも、捕手から、2塁手、センターへと一直線に格下げとなり、とてもプロ野球は無理だと、気づかせてくれた。

高校時代、憧れたのが朝日新聞の本多勝一記者。記者への夢は持ち続けた。大学3年。地元朝日新聞通信局のT記者に相談した。作文の添削までしてくれ、何とか記者になったのだ。「賢い選択」に導いてくれた叔母、T監督、T記者に感謝し続けている。

（日本経済新聞出身 足立則夫）